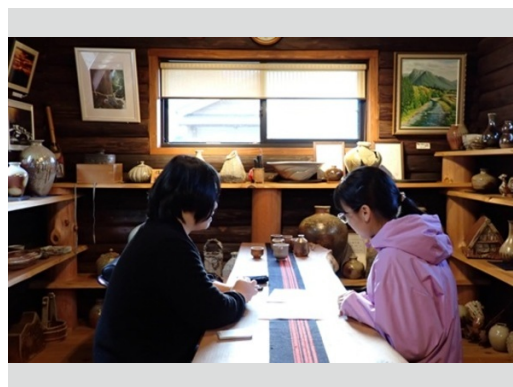


2025年度 研究成果報告書

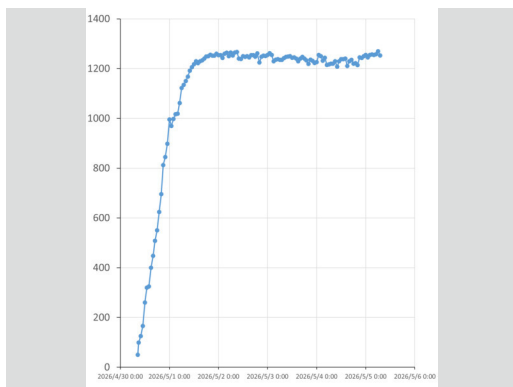
所属機関名	三重大学
申請者氏名	横山 真智子
分担者氏名	藪内 友佑、杉浦 亜紀
研究課題名	『窯焚き』文化継承プロジェクトを経験した大学生の地域参画意識の変容



窯焚き



インタビューの様子



2026春_窯の温度変化



座談会の様子

【研究の概要】

本研究は、三重県南部の山間地域（育生町）の伝統文化を支え、またそれ自身も日本の伝統文化である「窯焚き」の継承プロジェクトに参加した大学生を対象に、地域参画意識の変容とその要因を分析したものである。近年、後継者不足が課題となる中で、大学生が伝統技法を体験し、その過程をデジタルアーカイブとして記録する活動を通じて、地域文化への理解や地域住民との相互理解を深めることを目的として実施した。

活動に際しては、プロジェクト参加前後に質問紙調査や個別インタビューなどを実施した。集積されたデータから、学生の意識や行動に関わる複数の多角的な評価項目における活動前後の変化を定量的・定性的に把握し、内面的な変容をもたらした要因や、地域参画意識の向上に繋がるプロセスを検証した。

1年間の成果として、大学生の地域理解や愛着、地域課題解決への意欲向上が確認されたほか、デジタルアーカイブの整備が進んだ。本研究で得られた知見は、対象地域の持続的な発展に貢献するとともに、他地域における文化継承活動の展開に向けた有用なモデルケースとなることが期待される。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

① 背景と目的

三重県熊野市育生町にある穴窯「童心窯」では、地元の伝統的な祭りを支える陶器を焼き上げるため、古くからの伝統技法である「窯焚き」が受け継がれてきた。しかし、深刻な過疎化や高齢化により、地域住民だけではこの貴重な文化を維持することが難しく、後継者不足という大きな課題に直面している。

一方で、現代の都市部で暮らす大学生たちの多くは、社会に貢献したいという潜在的な願いを持ちながらも、「自分一人では社会の仕組みや地域の課題を変えられない」という無力感を抱きがちである。本研究は、この双方の課題を繋ぐために企画された。大学生が過疎地域の現場に入り、5日間24時間体制の窯焚きに参画する中で、学生たちの内面がどのように変化するかを検証した。伝統文化の維持という高い責任を伴う現場での経験を通じて、受動的なボランティアから、主体的な地域社会の支え手へと「地域参画意識」が変容していくメカニズムを解明することが本研究の目的である。

② 研究方法

プロジェクトには「IKOLLYE（いこらい）サポーター」の大学生たちが参加し、活動前後に意識の変化を捉える調査を行った。まず事前のアンケート調査により、学生一人ひとりの社会課題への関心や、地域活動に対する自信の度合いをあらかじめ把握した。

実際のフィールドワークでは、9月に赤土をこねて器を作る「作陶体験」を行い、10月末から11月にかけての6日間、昼夜交代制の「窯焚き」に臨んだ。手づくりの穴窯を使い、軽トラック12～13台分ものアカマツの薪を人の手でくべ続け、窯の中を1300℃の高温に引き上げる過酷な挑戦である。活動終了直後には、学生たちへ個別インタビューを実施した。事前に把握していた意識調査の結果と、実際の現場での五感を通じた体験がどのように結びつき、地域参画意識の変容をもたらしたのかを定量的・定性的なアプローチから総合的に分析した。

③ 研究によって得られた知見

分析の結果、学生たちがそれぞれの悩みや個性の違いを乗り越え、地域を支える一員としての意識を抱いていったプロセスが明らかになった。

・責任感と自己効力感の向上

地域活動の経験がなく自分に自信が持てなかった学生たちは、薪のくべ方一つで温度が激しく上下する火の予測不可能性や、地域の方々の大切な作品を預かっているという重圧に直面した。しかし、1300℃の熱気を肌で感じ、眠気と戦いながら深夜のシフトを仲間や住民とともにやり遂げたことで、「自らの手で地域の伝統を支える行事を成立させた」という達成感を得た。この体験が、地域活動への苦手意識を克服し、主体的に動き出す自信（自己効力感）へと繋がった。

・多世代交流による「地域コミュニティ」への愛着

真夜中の静まり返った里山の中、窯の前で、学生と地域住民など環境の異なる大人たちの間で会話が交わされた。普段の大学生活では関われない多様な生き方に触れた学生たちは、都市部の喧騒から離れた非日常空間の中で心身ともにリフレッシュすると同時に、人と人が温かく繋がり合う高密度な地域コミュニティの魅力に感動した。この心理的アプローチが、対象地域やその文化に対する愛着を育む契機となった。

・地域維持の担い手への意識

学生たちは活動中、バスが1日数便しかないインフラの脆弱さや、熟練の窯の先生への依存など、地域の構造的課題を感じた。「どうすればこの大切な伝統やコミュニティを維持できるか」を客観的に見つめるきっかけとなった。単なる「お客さん」としてのボランティア精神を超え、地域を一つの社会システムとして捉え、その維持に貢献しようとする意識が生じた。

④ 結論

本研究の結論として、「窯焚き」文化継承プロジェクトを通じたコミュニティへの参画経験は、現代の若者が抱く無力感を低下させ、受動的な「参加者」から、客観的に地域の持続可能性を探る「地域参画の主体」へと意識を変容させることが明らかとなった。

2. 今後の研究の見通し

本研究において、三重県熊野市育生町の「窯焚き」文化継承プロジェクトへの参画が、大学生の地域参画意識をどのように変容させ、受動的な参加者から主体的な担い手へと成長させるか、そのメカニズムの一端を解明した。

しかし、これらの成果を今後の地域教育や文化継承活動においてどのように拡大・展開していくかという点においては、実務的・学術的な課題が残されている。本プロジェクトで構築した地域学習モデルは、特定の地域資源（手づくりの穴窯や指導者の技術）や、特定の学生コミュニティ（IKOLLYEサポーター）の活動に依存している側面があり、他の地域や異なるテーマのプロジェクトへ横展開（一般化）するための具体的な制度設計には至っていない。本研究で得られた知見を一過性の事例で終わらず、持続可能なシステムとして社会に定着させるため、今後は以下に示す3つの方向性から、現実的かつ段階的な研究の展開を進めていく。

① 複数年追跡による「変容の持続性」の定量的・定性的検証

本研究で意識の変容が確認された学生たちが、大学卒業後や社会人になった後も、継続して対象地域やその他の地域社会に関わり続けているかという「変容の長期的な持続性」を検証する必要がある。

本研究は活動直後の短期的な意識変化の測定に留まっていたため、今後は同じ参加者を対象として縦断的調査を実施する。現場での多世代間交流が、若者のその後のキャリア選択やライフスタイルにどのように結びついているかを明らかにしていく。

②「他地域・他分野」へのモデル展開と適応プロセスの解明

本研究で得られた「初期レディネスに応じた個別適応型の変容モデル」を、窯焚き以外の伝統文化、例えば農業・林業・防災といった異なる分野の地域課題へ適用し、その汎用性を検証する。

具体的には、他の過疎山間地域で実施されているプロジェクトベース学習（PBL）と連携し、「意図的な多世代交流の構造化」や「次世代への伝承」を組み込んだカリキュラムを試験的に導入する。職人氣質の強い伝統技法以外の現場においても、学生が同様の「適度な負荷と責任」を経験することにより意識変容させられるかを比較分析し、より汎用性の高い「地域学習プログラム」の開発を目指す。

今後は、研究の成果を学術論文等として公表すべく、準備を進めている。

若者を一過性のボランティアで終わらせず、地域の存続に関わる当事者（関係人口・関係主体）へと育てる本研究の取り組みは、過疎地域の持続可能性を高めるだけでなく、現代の若者が抱く無力感を打破し、主体性を育むという高等教育の新しいあり方を提示する。今後も段階的かつ現実的に積み重ねていきたい。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

・窯焚き文化継承プロジェクトを経験した大学生の地域参画意識の変容：持続的な地域課題解決をめざす家庭クラブ活動への示唆，日本家政学会第78回大会